

そのときがきたら・映画監督山中貞雄の青春

園田英樹

登場人物（登場順）

活弁士 1

活弁士 2

活弁士 3

活弁士 4

活弁士 5

活弁士 6

活弁士 7

山中貞雄

藤井春美・カメラマン

嵐寛寿郎・スター俳優

お露役的女優（小夜）

勘太役の男優

山中喜三右衛門（山中の父）

山中ヨソ（母）

山中作次郎（長兄）

山中えい（その妻）

山中道子（作次郎の娘）

山中喜与蔵（五男）

山中市太郎（次男）

浅井小夜

マキノ正博

マキノ省三

城戸品郎

滝沢英輔

三村伸太郎

稲垣浩

鈴木桃作

八尋不二

藤井滋司

マダム美夜子

小津安二郎

特高警察刑事

女

岸松雄

撮影所の給仕

舞台下手に演奏スペースがあり、そこにピアノ奏者がいる。舞台上の演技エリアを囲むようにして、それぞれの俳優たちのスペースがあり、そこに衣装や小道具類も置かれている。俳優たちは、その自分のスペースと演技エリアを自由に出入りする。(袖にひっこんでもかまわない)  
開演前、舞台に設置してあるセットに、映写機から無声映画が上映されている。

## ○1場

ロケ現場。

8人の活弁士が舞台に登場する。

活弁士は、それぞれ手に鳴り物を持っていて、それで調子をとりながら活弁する。

活弁士一同「今日は当劇場にご来場いただき、誠にありがとうございます」

活弁士1「館主になりかわりまして、わたくしども活動写真弁士が、深く

深く御礼申し上げます」

活弁士2「カツドン弁士とは、カツドンの弁当を食う男のことです」

活弁士3「ちがいます。活動写真弁士です」

活弁士2「失礼しました」

活弁士8「弁を活かす者。それが活動弁士」

活弁士6「言葉に命を吹き込むものというわけでございます」

活弁士7「サイレントムービー、無声映画の時代にはなくてはならない存在でございます」

活弁士5「音声のない映画に、わたくしどもが声で命を吹き込んでいたのではありません」

活弁士4「本日みなさまにごらんいただくのは、昭和の初期に活躍した、

一人の映画監督の物語」

活弁士一同「その男の名は、山中貞雄」

活弁士8が活弁士の衣装を脱いで、山中貞雄になる。

活弁士一同「時は1931年、昭和六年十二月、ところは京都の撮影所」

活弁士1「この当時の映画は、まだ活動大写真と呼ばれておりました」

活弁士一同「よい、スタート！」

初監督作品の撮影にのぞむ山中貞雄。この時、貞雄は22歳。

昭和六年十二月。

活弁士たちは撮影所の人々になる。

貞雄「うー、さむう。ええ、天気や。お天道さんに感謝、感謝。ええシャシンが撮れるで」

カメラマンの藤井春美26歳が新聞に目を通しながらやってくる。

藤井「おはよお、しゃどやん」

貞雄「おうっ、藤井さん」

藤井「いや、しゃどやん言うたら怒られるな。監督、おはようございます」

貞雄「なかなか慣れんなあ、監督呼ばれんの。なんかこそばゆいんや、監督言われると。しゃどやんでええよ」

藤井「そうはいきませんよ、監督」

貞雄「はい。今日も、お願いします」

藤井「いわれんでも、わかってますよ。山中貞雄第一回監督作品のカメラマンに抜擢されたんや。気合が入らんわけないやろ。傑作にしまようね、監督。ねっ、監督」

貞雄「照れるなあ」

藤井「(新聞を見て)満州のほうじゃ関東軍がはでにやつとるみたいやな。

チチハル占領やて」

貞雄「満州事変は関東軍がやったいう噂やけど本当ですかね」

藤井「たぶんな」

貞雄「どこまで行くつもりなんやろか」

藤井「いくとこまで行くかもしれんなあ」

貞雄「どないなんのやろ……」

藤井「あつ、おんたいのおみえや」

着流し姿の嵐寛寿郎がやってくる。

付き人たちが嵐の世話をやく。

貞雄「おんたい、今日もよろしくお願いします」

嵐「おうっ。監督、今日はこのシャシンのラストシーンやったな」

貞雄「はい」

嵐「立ち回りがあるやろ」

貞雄「はい」

嵐「昨日、寝とって、新しい手を思いついたんや。この嵐寛寿郎、生涯で

一番の立ち回りやで」

貞雄「そりや、すごそうですなあ」

嵐「わしがこう、むかってくる敵を、バツタバツタと切りまくるんや。血脂で切れなくなった刀を、つぎつぎと取り替えながら、土手を駆

け上がり、川に飛び込み、最後には船の上に這い上がって、見事百人斬り達成、そして鮮やかなみえを切る。これをワンカットでやりきるんや。どや、どや。客はよろこぶでー」

貞雄「ああ、喜ばはるやるなあ」

藤井「しやどやん、ほんまに、それでええんか」

貞雄「おんたい。嵐寛寿郎の殺陣は、日本一、いや、世界一やと、わしは思うとります」

嵐「そうか」

貞雄「わしだけじゃなく、アラカンのシャシンを見にくるお客も、みんなそう思うとります。なあ、はるさん」

藤井「は、はい」

嵐「よーし、わかった。しやどやん、おまえにまかせた。好きに撮ったらええ！」

貞雄「ありがとうございます」

嵐「頼むで、監督」

貞雄「へえ」

藤井「しやどやん、ちょっと、こっちにきてんか」

貞雄「なんや」

藤井「おんたいに、あんなこと言うて大丈夫なんか」

貞雄「大丈夫、大丈夫。わしにまかせといてーや」

藤井「わしや、しらんぞほんまに。おんたいを怒らせたら第一回監督作品が、最後のシャシンになるかもしれへんで」

貞雄「わしは、そうなってもかまへん。自分の撮りたいように、撮るんや」

藤井「わかった、覚悟はできとるわけやな。ほな、いこうか」

貞雄「さあ、みんな気合いれて行くで！ 抱寝の長脇差、ラストシーン撮

影開始します」

仕出し一同「お願いします」

貞雄「よーい、スタート！」

ヤクザたちが喧嘩場に向かうシーンの開始です。

舞台上に五人のヤクザたちが登場し、監督の指示にしたがい動き始めます。

貞雄「源太との決闘に向かう地回りのヤクザたち。はい、まずはゆっくり歩いて。しだいに、走りはじめます。もつと早く、もつと！ ビヤーツと走れ！ 前のやつ、うしろにさがれ！ 後ろのやつ、前に出ろ！ もつと激しく、いきりたつて！」

嵐「おい、おい、いつまでこんなことやっとるんや。立ち回りをやるんやなかつたんか」

貞雄「そこ、うるさい！」

嵐「なんやて」

藤井「すんません。監督の言うこときいたってください」

嵐「なんや、この撮影は。こりや、マラソンやっただけやないか」

貞雄「はい、そこで一同、磯の源太に切られて、ばっと倒れる！」

仕出したち一同「ウワーッ！」

嵐「源太は、わしやろ。わしなんも斬っとらんぞ」

貞雄「おんたい、出番です！」

嵐「おうっ！ やっと立ち回りやな。さあ、やったるで。ほらっ、仕出し

ども、さあ、どっからでもかかってこんかい」

貞雄「おんたい、カメラに背をつけてください」

嵐「あん」

藤井「こつちです、おんたい」

嵐「これでええんか」

貞雄「それで、ええです。そこにお露が駆けつけてくる」

お露役の役者（小夜）がくる。

貞雄「源太は、かけつけたお露の手をとり、倒れた勘太の手をにぎらせませ  
す」

嵐「立ち回りやないんか!？」

貞雄「手を取り、にぎらせる！ 『勘太、握ってくれるな、こりやあお露

の手だ。勘太、お露さんへの置き土産に、にっこり笑って死んで

行きな』」

嵐「いったいどうなつとるんや!？」

貞雄「勘太は、はげしい痛みをこらえて、にっこりと笑う。『ありがてえ、

お露さん』そのまま勘太は、がっくりとことされる」

嵐「えい、もうええわ」

貞雄「源太、カントア！」

嵐「勘太！」

貞雄「お露、カントアさん！」

お露役の女優「勘太さん！」

貞雄「源太、そこから、この道をまっすぐ、まっすぐ歩いて去って行く！」

嵐「歩くだけじゃ、まがもたんやろ」

貞雄「カメラ止めて。好きなように撮らせるって言ったやないですか」

嵐「そりや言うたけどなあ」

貞雄「武士に二言はない！」

嵐「しゃあないな！」

貞雄「源太、まっすぐ歩く！」

嵐「どこまで歩くんや?」

貞雄「そのまま、まっすぐ、どこまでも歩きつづける！ そこでカメラ、

倒れたジノやんの死骸にパンする！」

藤井「よっしゃ。こりゃ、いい絵や！」

貞雄「まっすぐ、まっすぐ、まっすぐ歩いて行くんや！」

死骸が立ち上がり活弁士になる。

活弁士1「笑って死にゆく勘太を送り、お露の頬にホロリと涙、渡世の意地も波間に散った、源太長ドス抱きしの、磯の潮音に去っていく」

活弁士2「おんたい嵐寛寿郎ははなはだ不満の撮影だったようですが、この作品は大ヒットいたします。若き監督の斬新な映像表現は、映画界に一石を投じたのでした」

活弁士4「以後、監督山中貞雄の快進撃が始まります。短い期間に23本の作品をつくりあげ、天才監督とうたわれます。しかし現在残っているフィルムはたったの3本しかございません」

活弁士5『丹下左膳余話・百万両の壺』『河内山宗俊』『人情紙風船』

他にもいい作品がいっぱいあったのに、今では見ることができません」

活弁士6「どうしてこういうことになってしまったかというのと、やはり戦争のせいなんです。当時保管状態が悪くなかったフィルムのほとんどが消失してしまっただのです」

活弁士4「戦争とはかくも芸術を傷つけてしまうものなのですね。まったくひどい！」

活弁士2「ちょっと時間を巻き戻します。1909年、明治42年の11月8日京都は下京区において、山中貞雄はオギャアと生まれました。

山中家の六男であります」

活弁士5「父は喜三右衛門、母はヨソ。二人がもう子供はできないだろうとたかをくくっていたところに、ポイトできてしまった末息子でございます」

活弁士6「ヨソは四一歳。まあ、いまでいうならかなりの高齢出産。そのぶん二人にとってはかわいくてしかたのない赤ん坊でございます」  
た」

## ○2場

山中家。

障子とか掛け軸とかちゃぶ台とか座布団など家財道具を出して、山中家へと変わります。

掛け軸の前には、けっこう大きな壺が置かれます。

貞雄、赤ん坊になる。

活弁士6 「オギヤア、オギヤア、オギヤア」

活弁士の一人が、母親のヨソになる。  
それに声をあてる活弁士。

活弁士2 「ただいま舞台の上で泣いておりますのが貞雄。まあ、こんなところ。風邪でもひいたら、どうするの。でも、かわいい。ほらっ、お母ちゃんが服を着させてあげますからねー。まことに目に入れても痛くないとはこのことでございます。はい、こっちはおいで」

と、ヨソは貞雄に学生服を着せていく。

活弁士3 「貞雄が生まれて、三年で明治は終わり、ロマンの花咲く、大正時代となりました」

活弁士2 「貞雄は体格もいいし、りっぱな兵隊さんになれるねー」

活弁士6 「うん、おいら学校出たら、りっぱな兵隊さんになるよ」

活弁士4 「貞雄はすすくと大きくなります。いまじやりっぱな中学生」

貞雄はあつというまに中学生。

活弁士の一人が、父親の喜三右衛門になって入ってくる。

ここからは、人物が喋りだします。

喜三右衛門「(酔っている) 兵隊なんぞには、ならんでええぞー」

ヨソ「お父さん。また飲んでらっしゃるのね」

喜三右衛門「兵隊がなんだ！ なにが国のためか。陸軍は薩摩の芋侍どもがかつてなことをしとるだけじゃ。貞雄、おまえは兵隊になんぞ、ならんでええ！」

貞雄「でも父さん、兵隊になるのは日本男児の義務やないですか」

喜三右衛門「うるさい！」

貞雄「兵隊がおらんと、日本が外国に攻められたら、どうするんですか」

喜三右衛門「わしは兵隊がすかんのじゃ！ わしは兵隊はすかん！」

ヨソ「お父さん、そんなこと大きな声で言うもんじゃありません。近所の人に聞かれます」

喜三右衛門「かまわん。すかんもんは、すかんのや」

活弁士5 「父親の喜三右衛門は、書画芸術に優れた才を持ち、扇子工芸の

おろし問屋若狭屋を営んでおります」

喜三右衛門「わしは生まれてこのかた。好き嫌いで生きてきた男やぞ。好きなもの、好き。嫌いなものは、嫌いなんや。ちなみにいつち

「あん好きなんわ、なんか知つとるか？」

ヨソ「わかっとります」

喜三右衛門「なんや言うてみ」

貞雄「酒やろ」

ヨソ「こら、貞雄」

喜三右衛門「(おどけて) はずれー」

貞雄「なら、なんや？」

喜三右衛門「わしがいつちゃん好きなんは、おまえのお母さんや。ウヒヒ

ヒ。ほら、おまえが欲しがった竹久夢二の画集、こうてきて

やっただ」

ヨソ「まあ、あんたのおおきにえ」

貞雄「どうせにせもんやろ。そんなもん」

喜三右衛門「ほんまおまえによう似とるなあ。ウヒヒヒ」

ヨソ「あつ、あんさん貞雄の前でやめておくんなはれ。あきまへんて、も

う」

喜三右衛門「ええんや、ええんや。ちよつとくらい。ウヒヒヒ」

貞雄「ええかげんにしてください！」

ゴゴゴゴッ！ 不気味な地鳴り音が聞こえてくる。

喜三右衛門「地震や、地震や、地震がくるで」

貞雄「なにいうてんの」

喜三右衛門「おまえたちにはこの音がきこえへんのか。わしには聞こえる

で、不気味な地鳴りの音が」

ヨソ「おとうさん、おちついておくれやす」

喜三右衛門「あ、なんや、これ。なんや……」

ヨソ「どないしはったんです、お父さん！」

喜三右衛門「あつ、こりや、わしあかんわ」

と、倒れてしまう喜三右衛門。

ヨソ・貞雄「お父さん！」

活弁士3「脳卒中でございました。これ以後、喜三右衛門は寝たきりになつてしまいます」

活弁士4「喜三右衛門が倒れてまもなくして、関東を巨大地震が襲います。

世に言う関東大震災。日本は一気に不況の波に飲みこまれます」

活弁士5「おりからの不況の風をもろに受けて若狭屋は一気に傾いてしま  
います」

活弁士4「(借金取りで) 若狭屋さん、借金返してくんははれ」

活弁士3「(借金取りで) 今月の支払い、まだなんですけど」

活弁士2「(愛人で) あたし喜三右衛門の愛人だったの。慰謝料払って」

活弁士(借金取り) たちは、家財道具の金目のものなどを取  
って行く。壺は残ります。

貞雄「お母ちゃん……」

ヨソ「嵐の時はな、じつとがまんしてれば、いつか嵐は去っていくもんな  
んや」

貞雄「ほんまに？」

壺の中からヘソクリを取り出すヨソ。

ヨソ「そやな、活動見に行こか？」

貞雄「活動？」

ヨソ「お母ちゃんな、活動がいちばん好きなんや。活動写真見とったら、  
つらいこと嫌なことぜんぶ忘れてしまうよって」

貞雄「お母ちゃん、見に行こう！」

『映画へ行こう』(歌です)

ヨソ「映画を見に行こう」

貞雄「映画を見に行こう」

ヨソ「扉を開ければ そこには」

貞雄「見たこともない 別世界」

作次郎「暗闇に光さして」

市太郎「物語が始まれば」

全員「ツライこと イヤなこと」

全員「忘れられる」

喜与蔵「時には 名探偵」

えい「時には お姫さま」

小夜「動物ともしゃべれる」

道子「宇宙だって 行ける」

全員「映画を見に行こう」

全員「映画を見に行こう」

えい「なんでもありの おもちゃ箱」

作次郎「ロマンス」

市太郎「エスエフ」

喜与蔵「笑い転げる」

道子「コメデイ」

貞雄「アクション」

小夜「涙止まらない 悲劇」  
全員「映画を見に行こう 映画を見に行こう 映画を見に行こう」

### ○3場

山中家。

ヨソ (58)

長男・作次郎

妻・えい

めい・道子 (5)

五男・喜与蔵 (大阪高商2年)

六男・貞雄 (17京都市立第一商業4年)

活弁士一同「(蝉の声) ミーン、ミーン、ミーン、ミーン」

活弁士7「きんぎょーえー、きんぎょ。きんぎょーえー、きんぎょ」

活弁士6「時は流れて1925年、大正十四年。寝たきりだった、父親喜

三右衛門があっけなく亡くなりました。享年69歳。チーン！ 大震災の二年後です」

活弁士7「社会主義者たちを徹底的に弾圧する、治安維持法が制定されました。ほぼ同時に女性に参政権を与える普通選挙法が公布されます。飴と鞭ですね」

活弁士が作次郎になる。

作次郎「山中家、長男作次郎36歳。親父を反面教師にして成長した真面目な職人です」

活弁士が妻えいになる。

えい「その妻、えい34歳。若いときは舞子はんにあこがれたときもありました」

活弁士がその娘道子になり、紙風船で遊ぶ。

道子「作次郎とえいの娘で貞雄の姪、道子。五歳」

活弁士が喜与蔵になる。

喜与蔵「五男、喜与蔵、19歳。美少年といわれてました」

活弁士6 「なんで長男の次にいきなり五男と六男の貞雄しかいないのかと  
いうと」

活弁士7 「次男市太郎は、父親の喜三右衛門も顔負けの遊び人、飲む打つ  
買うの三拍子そろった極道で、家を飛び出しついでに行方不明」

活弁士6 「長女のトモは、嫁に行き、三男と四男は養子に出されておりま  
す」

作次郎 「今日、みんなに集まってもらったのは、ほかでもない。喜与蔵と

貞雄のこれからのことを話し合おうと思つてや」

貞雄 「えー、またその話ですか、にいさん」

作次郎 「またとはなんだ、またとは」

貞雄 「またの話しは、たまにして」

喜与蔵 「たまはニコニコぶーらぶら」

貞雄 「うまいこと言うね、きよ兄い」

喜与蔵 「しもやけどな」

作次郎 「喜与蔵、貞雄、まじめに聞け！」

喜与蔵・貞雄 「すんまへん」

道子 「たまがニコニコぶーらぶらつてなーに？」

貞雄 「それはねー」

えい 「貞雄さん！」

貞雄 「ネコのタマがニコニコしてぶらぶらしてたら可愛いやろ」

道子 「うん。かわいい」

貞雄 「そういうことや」

道子 「タマがニコニコぶーらぶら」

えい 「道子静かに」

道子 「はーい」

ヨソ 「喜与蔵、貞雄、兄さんの話をちゃんと聞きなさい」

喜与蔵・貞雄 「はい……」

作次郎 「父さんが亡くなったからというわけではないが、この家の家長は

わしや。わしには、おまえたち二人をりっぱな男に育てる義務が

ある」

喜与蔵 「兄さん、そない心配せんでもええですよ。わしらは、わしらであ

んじょうやつていくさかいに。なあ、貞雄」

貞雄 「あ、うん」

作次郎 「喜与蔵、おまえはまだ世の中の厳しさをしらんから、そないなこ

とが言えるんや。世間は、そんなにあもうないぞ」

えい 「そうよ、きよさん、さださん。兄さんは、あなたたちのことを思っ

て、こうして……」

作次郎 「えい、おまえは黙つとれ」

えい 「いいえ、今日はうちも言わせてもらいます。きよさんやさださんた

ちを学校に行かせるためいうて、なんであんさんばかりが苦勞せ

なあかんのです。あんさんは十五のときから、ずーっと働きづめやないですか。なんであんさんばかり。この人たちかて、もっとしっかりしてもらわな」

作次郎「黙っとれ！」

えい「道子、あつちで遊んでき」

道子「お父ちゃん、お母ちゃんをおこらんといてな」

と、道子出て行く。

ヨソ「すまんなあ、えいはん」

作次郎「かあさん、わしらはええんです。こいつかて、わかつて嫁にきとるんやから」

えい「なんであんさんは、お母さんと弟はんたちには、そんなにやさしいんです。うちにはなんにもしてくれへんのに」

作次郎「だまらんかい！」

作次郎はえいを叩いてしまう。

ヨソ「作次郎！」

えいが作次郎を叩き返す。

アツとなる一同。

えい「女も、いつまでも黙ってばかりはおりませんよ」

えいは部屋を出て行く。

作次郎「なんでこうなるんや！」

貞雄はノートを取り出して、何やら書きつけている。

喜与蔵「すごいなあ、姉さんは」

貞雄「ああ。強い」

作次郎「あいつは特別や」

ヨソ「作次郎はん、たまにはえいさんを活動にでも連れて行って、おいしいものでも食べさせてあげなはれ」

作次郎「わかっています」

貞雄「わしも一緒に行きたいなあ」

喜与蔵「こらっ」

作次郎「喜与蔵も貞雄も来年は学校卒業や。そのあとどうするか、もう決

めたんか」

喜与蔵「わしは高商を出たら、伊藤万に入るつもりです」

貞雄「えっ、きよ兄、学校でてわざわざ丁稚奉公するんでっか!？」

喜与蔵「丁稚いうな」

貞雄「そやかて」

喜与蔵「あきんど修行や。こう、バシッとまえかけつけてな。『おこしや

す』って。すぐに出世してやるて。いずれは自分の店を持ったる」

ヨソ「あきないは大変やで。お役所とかに入れんの？ お給金きちんきち

んとでるんやろ、お役所は」

喜与蔵「わしに役人は無理や」

貞雄「そやな、きよ兄には役人は無理やな」

喜与蔵「おまえが言うな」

作次郎「貞雄、おまえはどうするんや？」

貞雄「わしは……」

ヨソ「兄ちゃんみたいに高商行ってもええんやで」

貞雄「もう学問は、ええわ。ソロバン苦手やし」

作次郎「ほな、どうするつもりや」

貞雄「遊び人になりたいなあ」

作次郎「あほなこと言うな！」

貞雄「おー、こわあ」

作次郎「遊び人は、市太郎だけでじゅうぶんや」

ヨソ「作次郎、市太郎のことは悪く言わんといて」

作次郎「そやかて」

ヨソ「市太郎は、お父ちゃんに似てしもたんや」

作次郎「……」

ヨソ「市太郎からは、なんの連絡もないんか？」

作次郎「音沙汰なしや。どこぞでのたれ死んどるに決まっとる」

喜与蔵「兄さん、そこまで言うことはないやろ」

作次郎「あいつのことは、どうでもええ！ 今の問題は、おまえたちや。

貞雄、どうすんのや」

貞雄「わしは……その……うーん……なんていうかなあ」

作次郎・ヨソ「はっきりせんかい」

貞雄「わしは……」

喜与蔵「貞雄は、映画をやりたいんやろ」

貞雄「兄ちゃん」

喜与蔵「おまえいつも言うてるやんか。映画会社に入って映画作りたいっ

て」

作次郎「なにばかなこと言うとのや。そんなもん、できるわけないやろ」

喜与蔵「できるか、できんかは、やってみんとわからん」

作次郎「あんなもん、まともな人間のやることとちやう。河原乞食のやる

こっちゃん」

喜与蔵「扇子職人はまともで、映画はまともやないん言うか、兄ちゃんは作次郎「うるさい、口答えすんな」

喜与蔵「貞雄一人くらい、好きにやらせてやってもええやんか！」

作次郎「わしは、おまえたちのことを思っ言ってるんや！」

と、つかみあう喜与蔵と作次郎。

間に入るヨソ。

ヨソ「あんさんたちやめなはれ。やめなはれ」

貞雄は、またノートに書きつけている。

それに気づき、ノートを取り上げる作次郎。

貞雄「あっ」

作次郎「おまえさつきから、なんなんや！」

ノートには、漫画が描かれている。

作次郎「なんやマンガなんぞ描きおって！」

貞雄「すんません」

喜与蔵「ようかけてんな」

ヨソ「ほんまや」

喜与蔵「おっ、こりや動くで」

ヨソ「わあ！」

喜与蔵「貞雄は、絵描きになるのもええかもな」

ヨソ「それもええ、それもええ」

作次郎「あほらしゆうて、話しにならん！ 貞雄、ちゃんとせなあかんぞ！」

作次郎部屋を出て行く。

ヨソ「兄さんは、おまえたちを心配してくれてはるんやから。しっかり考えておくれ。でも、ほんまよう描けてるわ」

と、ヨソも部屋を出て行く。

喜与蔵「心配してくれるのも、ありがたいけどなあ。ありがた迷惑ちゆうのもあるよな」

貞雄「さつきはありがとうお」

喜与蔵「なんのことや」

貞雄「映画のこと、わしの代わりに言うてくれて」

喜与蔵「おまえのことは、わしが一番ようわかつとる。でも、おまえほんまに映画をやりたいんか？」

貞雄「わしも、まだようわからん。映画は好きやけど、それで飯を食べるちゆうのは、どういふことなんか」

喜与蔵「そやな……それは、わしにもよーわからんな。まあ、じっくり考えればええやろ」

貞雄「うん」

喜与蔵「それ、よー描けてると思うで、わしも」

部屋を出ていく喜与蔵。

貞雄、まごろりと横になる。

またノートになにやら書きはじめる貞雄だ。

市太郎「いいから、いいから」

小夜「でも」

市太郎「遠慮せんと」

市太郎が、小夜を連れて入ってくる。

貞雄「えっ!?!」

市太郎「よっ」

貞雄「な、なに!?! なんなんや!?!」

市太郎「ん!?! 誰だっけ?」

貞雄「それは、こっちのセリフや」

市太郎「んー、この顔は、貞雄か。貞雄やろ」

貞雄「え、え」

市太郎「やつば貞雄や。大きゆうなつたなあ」

貞雄「市太郎兄さん……?」

市太郎「そや。やつとわかったか。まあ、ししゃあないか。おまえと遊んでやってたところは、まだこんなに小さかったからなあ」

貞雄「兄さん……」

市太郎「おひけえなすつて。おひけえなすつて」

貞雄「えっ!?!」

市太郎「ひかえろ」

貞雄「は、はい」

市太郎「さっそくおひかえなすつて、ありがとうござんす。手前生国と発しまするは、日本国の都の中の都、京都でござんす。京都で生まれ、京都で育つた、きつすいの京都っ子。しかし、わけあって今

は流れ流れの渡り鳥。姓は山中、名は市太郎。お見知り置きを願います」

貞雄「はい」

市太郎「なーんてな。久しぶりやなあ、貞雄。元気やったか」

貞雄「あ、うん」

市太郎「おとつあん、おっかさんは達者か？」

貞雄「お母さんは元気やけど、お父さんはこないだ死んだよ」

市太郎「え……」

貞雄「なんでもっとはよう帰ってきてくれんかったんですか」

市太郎「そうかあ。……あんだけあびるほど酒飲んでたら長生きはしねえ

だろうと思つてたけどな。そうか、死んじまったか……」

貞雄「そや、いまみんなを呼んでくるさかい。ちようど集まつたところ

なんや」

市太郎「呼ばんでいい」

貞雄「えっ!？」

市太郎「今は挨拶してゐるひまがない」

貞雄「どうして？」

市太郎「急ぎの用があつてな。おまえに一つ頼みがある。引き受けないと  
は言わせねえぜ」

と、ふところのドスをちらりと見せる。

貞雄「そんな」

市太郎「この子を、ちよつと預かっておいて欲しいんや」

貞雄「えっ!？」

市太郎「すぐに帰ってくるから。それまでの間、ここにかくまっておいて  
くれ」

貞雄「かくまうつて……追われてるんですか？」

市太郎「だから頼んでるんじやねえか」

貞雄「は、はい」

市太郎「簡単に言うどだな。この子は借金のかたに悪いやつに売られよう  
としてゐるんだ。それを正義の味方の俺が助けてやろうとしてる

つてわけよ」

貞雄「そうなん？」

小夜「はい」

市太郎「まずは金を作らなきゃならねえ。なつ、わかっただろ」

市太郎は、部屋に置かれていた壺を抱き抱える。

市太郎「あつた、あつた。これだよ、これ」

貞雄「どうするんですか、その壺？」

市太郎「これは、百万両の壺なんだ」

貞雄「えっ?! うっそー」

市太郎「国宝級のえらいしろもんだってことはまちがいねえんだ。親父が土佐の山内容堂侯の稚児さんやってたときに、殿様から拝領したもんじゃないからな」

貞雄「知らなかった」

市太郎「酔っぱらってたときに、親父がポロツともらしたのさ」

貞雄「百万両の壺……」

市太郎「人助けの役にたつんだったら、こんな家で腐ってるより、よつぽどいい。死んだ親父も喜ぶってもんだろ」

小夜「でも、あたしなんかのために、そんな大事なものを」

市太郎「あんたは気にしなくていいんだよ。大船に乗った気持ちで、ここで待ってな」

小夜「はい……」

市太郎「じゃあ、おれはちよつと行ってくる。貞雄、小夜さんを頼んだぜ」  
貞雄「えーっ?!」

市太郎は壺を抱えて走り去る。

貞雄「小夜さんていうんですか？」

小夜「はい。浅井小夜と申します」

貞雄「山中貞雄です。兄さんが言ってたこと、本当なんですか？」

小夜「だいたいは」

貞雄「そうですか……」

小夜「父が友人の保証人になってしまったせいで、身に覚えのない借金に追われることになり、とうとうわたしは……」

貞雄「どうぞ……」

小夜は居間にあがる。

貞雄「兄とあなたは、どういう関係なんですか？」

小夜「関係って？」

貞雄「つまり、その……あなたは、兄の……こいびと……」

小夜「そんなんじゃないやありません。わたくしが女給の仕事を探そうとしていたところに、通りかかった市太郎さんが、あんたみたいなお嬢さんが女給やろうなんて、なにかよほどの理由があるんだろと声をかけてくださって。それで事情をお話したら、こういうことに……」

貞雄「それだけですか」

小夜「はい」

貞雄「兄さんらしいなあ……」

ヨソの声「貞雄、おやつ食べるか？ ようかん切ろか？」

貞雄「あつ……いまはいいよ。お腹いっぱいから」

ヨソの声「遠慮したあかん。そっち持ってくるさかい」

貞雄「あつ、どうしよう……そうだ」

と、学生服を脱ぎ出す。

小夜「なにをなさるんですか？」

貞雄「いや、そういうんじゃないから。これ、着てください」

小夜「どうして？」

貞雄「とにかくお願いします」

小夜「は、はい」

小夜は、学生服を着始める。

ヨソの声「貞雄、お茶も飲むやろ？」

貞雄「お茶いらんから。お母さん、お茶はいらんから！ （小夜に）早く、

これがかぶって」

と、帽子を小夜にかぶせる。

ヨソが、お盆にお菓子とお茶をのせてやってくる。

ヨソ「おやつもお茶もいらんて、おまえらしゆうないな。貞雄、おまえ縮

んだんやないか？」

貞雄「わしはこっちや」

ヨソ「うわっ、なにしとんにや、裸で」

貞雄「あんまり暑いから、ちよつと水浴びでもしようかなおもて」

ヨソ「あんさんは？」

小夜「わたしは……」

貞雄「あー、こいつはわしの友達、急に遊びにきよったんや」

ヨソ「ああ、お友達かい」

貞雄「浅井、うちのお母はんや、あいさつしよ」

小夜「あ、はじめまして。小夜……いや、浅井です」

ヨソ「浅井さん。いつも貞雄がお世話になっとります」

小夜「いえ……」

ヨソ「お客はんにも、おやつ持ってくるわな」

と、ヨソは戻って行く。

貞雄「あー、びっくりした」

小夜「いいんですか、お母さんに嘘ついて」

貞雄「じゃあないやろ」

小夜「すみません」

そこにえいと作次郎がくる。

えい「みなさん」

作次郎「さつきは見苦しいところ見せてすまんかったな」

えい「あら」

作次郎「なんやおまえ、その格好？」

貞雄「いや、水浴びしようかとおもって」

作次郎「ん？ 誰や？」

貞雄「わしの友達。浅井君や」

小夜「どうも」

えい「お友達？」

貞雄「急にきよってな」

作次郎「そうか。なら、おまえ裸じゃあかんやろ」

貞雄「そりや、そやな。ほな、わしちよつと服着てくるよって」

小夜「あの……」

貞雄「おとなしうしとってや」

貞雄は出て行くが、すぐまた戻って来て、

貞雄「浅井君は、学校で一番の恥ずかしがり屋やさかい、お兄さんも、お

姉さんも、話しかけんといってくださいよ」

と、出て行く。

えい「浅井さんは、恥ずかしがり屋さんなん？」

小夜「(うなずく)」

えい「そうなん。こっちにき」

作次郎「おい、ええかげんにしときや」

えい「だって可愛らしいんやもん。貞雄さんと同じ年には見えへん」

作次郎「たしかにそうやな。背も小柄やしな」

えい「まるで女の子みたい」

作次郎「これからぐんぐん竹の子みたいに大きくなる時期やって」

えい「いややわあ、竹の子やて」

作次郎「なあ、浅井君。いずれはりっぱな兵隊さんになってもらわにやな

あ

小夜「なりません」

作次郎「なんでや。日本男児はお国のために一度は兵隊になるのは義務やぞ」

小夜「あ、すみません……つい……」

作次郎「つい、なんや!？」

えい「あなた、もうええやないですか。口がすべったんやな、浅井はん」  
小夜「はい」

作次郎「口がすべっても、そんなことは言うたらあかんよ。浅井君。日本は欧米列強に対して、アジアを守っていかんやならん国なんや。

その国を守る兵隊はんは、りっぱな仕事や」

小夜「はい」

えい「えらそうなこと言うとするけど、この人は兵役いっとらんよ」

作次郎「わしは行きたかつたんやけど、弟たちを養わなきゃならんかつたから……」

小夜「(つい笑い)すみません」

えい「ほんま、この子はかわいらしい子やなあ」

服を着た貞雄と喜与蔵が来る。

喜与蔵「おまえに浅井なんていう友達おったか？ わしは知らんぞ」

貞雄「最近友達になつたんや」

喜与蔵「なら、わしにも紹介せんか」

貞雄「あらためて紹介するような友達やないって」

喜与蔵「おまえ、そんなんを家に連れてきたんか!？」

貞雄「ちよつと事情があつて……」

喜与蔵「なんや事情つて」

貞雄「それは……」

小夜「すみません、それは……」

貞雄「あー！ あーッ！」

作次郎「どないした!？」

貞雄「(困り)あーっ!」

えい「あなた、壺が。壺が」

作次郎「壺がどうした?」

えい「のうなってます」

作次郎「なんやて」

喜与蔵「ほんまに消えとる」

作次郎「さつきまでそこにあつたやないか」

えい「そやかて」

喜与蔵「壺に足がによきつとはえて、とことこ逃げ出しよつたのかも。こ

んなうるさい家はいやや言うてな」

貞雄「あつ、それおもしろい」

作次郎「あほぬかせ！ あの壺は、親父殿が大事にしとったもんやぞ」

えい「家宝の壺やおっしゃってましたな」

作次郎「そや。うちに残った最後の宝やぞ」

喜与蔵「そない言われても、わしが知るかいな。なあ、貞雄」

貞雄「あ……うん」

作次郎「いま間があつたな」

えい「ええ、たしかに0・5秒くらい」

作次郎「おまえ、なんか隠しとるな」

貞雄「いや、そんなことないて」

作次郎「貞雄、おまえ壺をどこにやったんや」

えい「貞雄ちゃん、ほんとのこと言うてみ」

喜与蔵「こいつが壺なんぞ取るわけないやろ」

貞雄「そや、そや」

作次郎「質に入れたんか!？」

貞雄「そんなことしてません！」

ヨソがおかしとお茶を持って来る。

ヨソ「お茶が入ったで……」

貞雄「あつ、お母あちゃん」

ヨソ「なんや、みんなおつたんかいな。お茶がたらんやないの」

作次郎と喜与蔵はヨソに壺が無くなっているのを見せまいとする。

えいは、ヨソからお盆を奪いとる。

えい「さあ、浅井さん、どうぞどうぞ」

小夜「ごめんなさい」

ヨソ「ご丁寧な人やねえ、貞雄のお友達は」

小夜「ぜんぶ、あたしのせいなんです！ すみません」

貞雄「あちゃー」

暗転。

明かりが入ると、学生服を脱いだ小夜を囲むようにして、貞雄、喜与蔵、作次郎、えい、ヨソが座っている。

作次郎「貞雄、作り話はもうええ。ほんとのことを言いなさい」  
貞雄「だから、本当なんです」

えい「市太郎兄さんが、この娘をつれてふらっと帰ってきて、壺持って消えたって？」

貞雄「はい」

作次郎「言うにことかいて、市太郎のせいにするなんて。とんでもない」  
貞雄「だから……」

作次郎「もうえええ！ この娘さんは、どちらのかたや」

貞雄「さあ」

喜与蔵「貞雄、わしはお前を見直したで」

貞雄「えっ!？」

喜与蔵「映画にばかり夢中で、おなごのほうは、とんと奥手やと思うと  
ったけど、ちゃっかり連れこんで逢引きしとるとはなあ」

えい「そうなん？」

喜与蔵「やるやないか、おまえも」

貞雄「いや、だからちやうって」

喜与蔵「恥ずかしがらんでもええやろ。なあ、みなさん、ここは無粋なこ  
とせんと、二人だけにしてあげましようよ」

ヨソ「そうね。貞雄がはじめて女の子を家に連れてきたんやもんね」

貞雄「お母ちゃんまで」

ヨソ「(サムアップし) イエイ！」

喜与蔵「さ、さ、行こ、行こ」

作次郎「壺は？」

喜与蔵「気にしない、気にしない」

ヨソ「行きましよう、行きましよう」

えい「二人は、どこでおうたん？」

作次郎「えい！」

と、作次郎、えいを追い立てるようにはて行く。

小夜「(神妙にしていた小夜、堪えきれなくなり笑ってしまう)」

貞雄「なんで笑うんですか」

小夜「なんだかおかしくて」

貞雄「わしは、ちっともおかしくくないです」

小夜「ごめんなさい」

貞雄「おかしくくないですよ」

小夜「そうですね。……フフフ」

貞雄「(貞雄もつられて笑う) フフフ」

小夜「いいご家族」

貞雄「そうですか」

小夜「ええ……うらやましいです……(涙をこらえる)」

貞雄「……小夜さんは、活動は好きですか？」

小夜「はい……？」

貞雄「うちは家族みんな活動が大好きで……親父が卒中で倒れてから、母は活動写真を見て帰ると、寝たきりの親父にスジを話してやってみました」

小夜「お優しいお母さま」

貞雄「それがおかしいんです。身振り手振りで、まるで本物の活動弁士みたいで。赤木の山も今宵かぎりだ。かわいい子分のおまえたちともはなればなれるなかで。親分！ 泣いちゃいけねえ、泣くんじゃねえ！ 見上げた月も泣いている。なんて、親父もうれしそうです」

小夜「……………」

貞雄「わし、活動やりたいんですよ」

小夜「えっ、役者になるんですか？」

貞雄「そうじゃなくて、作るほう」

小夜「作る？」

貞雄「活動も誰かが作ってるんですよ」

小夜「でも作ってる人のことなんて、考えたこともなかったから」

貞雄「そりゃ、そうですね」

小夜「すごいです」

貞雄「なにが？」

小夜「作るなんて」

貞雄「いや……思ってるだけですから」

そこに市太郎が戻ってくる。

市太郎「おうおう、なんかいい雰囲気なんじゃないの、お二人さん」

貞雄「兄さん」

市太郎「おう貞雄、またせたな」

小夜「市太郎さん……」

貞雄「どこに行ってたんですか？」

市太郎「伝次郎さんのところに行ってきた」

貞雄「伝次郎？ 誰ですか、それ？」

市太郎「伝次郎いうたら、大河内に決まっとる」

貞雄「チャンバラの大河内伝次郎？」

市太郎「そうや」

貞雄「なんでまた」

市太郎「相手は活動写真の大スターや、これ持っとる」

貞雄「そりゃあ……知り合いやったんですか？」

市太郎「こっちはよー知っとる」

貞雄「えーッ」

市太郎「あの壺、百万両の価値があるって言うたら、あの旦那、即決でこ  
うてくれたで。さすが大スターは違うな。ほらっ、五百円！」

作次郎・えいの声「五百円！」

障子が開くと作次郎、喜与蔵、えい、ヨソ、道子が立っている。  
る。

市太郎「おう、ご一党さんおそろいで。お久しぶりでござんす」

ヨソ「市太郎……おまえ、生きてたんやね」

作次郎「この馬鹿野郎がア！」

いきなり市太郎を殴る作次郎。

市太郎「なにするんや！」

作次郎「親父の死に目にも帰ってこんど、泥棒みたいなことしておって！」

市太郎「……………」

作次郎「なんや、その目は。わしを刺すんか？」

市太郎「刺して欲しいんか」

作次郎「刺せるもんなら、刺してみい」

えい「あなた、やめてください」

道子「やめてー」

喜与蔵「兄さん、そりゃあかんで」

小夜「市太郎さん、お願いです」

乱闘となる。

貞雄は、短刀の鞘を拾って、それをテーブルに打ちつけて、  
拍子木を鳴らし、一同の動きを止める。

貞雄「(活弁士のまねで)こらえかねたる内匠のかみ、上野介に切りかか  
り、松の廊下に怒号うずまく！ 浅野殿、殿中ござる。殿中  
ござる。殿中ござるー！」

喜与蔵「殿中での刃傷ぎたは御法度でござる。御法度でござるぞー！」

作次郎「内匠の守、おぬしは、切腹じゃ！」

市太郎「はなせ！ はなしてくだされ！」

貞雄「どうか刀をおひきください！」

喜与蔵「刀をおひきください！」

一同笑ってしまう。

貞雄「むかしみんなで、忠臣蔵の活動見に行ったよなア」

ヨソ「おもろかったなあ」

市太郎「へッ、そんなこともあったっけな」

ヨソ「おとうちゃんは、忠臣蔵好きやったもんなあ」

作次郎「……そうやった」

市太郎「酒が一番やったけどな……」

作次郎「ああ」

ヨソ「うちが一番や」

貞雄「作次郎兄さん、わし決めたで」

作次郎「なんやいきなり」

貞雄「わしに活動やらせてくれ！」

作次郎「そんな無理に決まっとるやろ」

貞雄「頼みます！」

作次郎「……」

ヨソ「やらしてあげなはれ」

えい「あんさん……」

作次郎「もう知らん！」

貞雄「おおきに、おおきに！」

喜与蔵「よかったな、貞雄」

道子「よかったね、お兄ちゃん」

市太郎「なんや知らんが、よかった、よかった」

作次郎「あとで泣いても、わしや知らんぞ」

市太郎「兄ちゃん！」

作次郎「なんや。まだなんかあるんか」

市太郎「頼む、この金は、貸しといてくれ。どうしてもいる金なんや」

作次郎「わしやのうて、お母さんにきけ」

市太郎「おっかさん……」

ヨソ「市太郎、おまえは……」

市太郎「ほな、わしは小夜さんの件のかたをつけてくるさかい。ほな行」

か、小夜さん」

小夜「はい……」

市太郎「それでは、ご一党さん。失礼さんにござんす」

小夜「みなさん」

貞雄「はい……」

小夜「ありがとうございました」

市太郎「あにき、喜与蔵、貞雄……おかあちゃんを、たのむで」

ヨソ「市太郎！ うちも会いたかったで、大河内伝次郎はん！」

えっ!?! となる一同だ。

道子が、活弁士に変わる。

ヨソ、作次郎、えい、喜与蔵は山中家のセットを変えながら出ていく。

活弁士4 「さて、ついに活動写真をやると宣言をってしまった山中貞雄。

どうやって映画会社に入るのか!? どうすんだよ、貞雄」

貞雄 「うるさいなあ。おまえ誰や?」

活弁士4 「きみの映画の活動弁士でしょ」

貞雄 「わしの映画の……」

活弁士4 「そう」

貞雄 「わしはまだ映画作つたらんぞ」

活弁士4 「きみがまだ作つてない映画の活動弁士なの」

貞雄 「いかん、いかん。あんまり映画のことばかり考えてとるから、おるはずのない活弁士まで見えてきおつた」

活弁士4 「いや、いるからここに、ちゃんと」

貞雄 「そうや。マキノさんに頼んでみよ」

活弁士4 「マキノさん?」

貞雄 「おまえ活弁士のくせにマキノ知らんのか? マキノ映画社。月形竜

之介、嵐長三郎、片岡千恵蔵。チャンバラ。あのマキノにきまつとるやろ」

活弁士4 「この当時の映画界の状況は、東に松竹、西に日活、この二大会

社が日本映画界を二分しております。そこになぐりこんだのが

マキノ省三ひきいる、マキノプロダクションだったのです!」

貞雄 「知つとるやないか」

活弁士4 「きみのラグビー部の先輩が、マキノ映画の社長の息子、マキノ

正博さんだったんだよね」

貞雄 「先輩なら、わし一人くらいなんとかしてくれるやろ」

活弁士4 「日本映画界の大監督の一人となるマキノ正博は、十九歳にしてすでにマキノ映画の若手スターであり、新進の監督でもあります。この人も、すごい人物であります。ここはマキノ省三の家の玄関先」

舞台は、マキノ家の玄関先と変わる。

マキノ正博が現れる。

正博 「わしいま忙しいんやけど。だれなん、わしに用って?」

貞雄 「先輩、わしです、山中です」

正博 「山中?」

貞雄 「は」

正博「知らん」

貞雄「え」

正博「物売りなら、なんもいらんから。宗教の勧誘もかんべんな。おやじは金光教やし、わしは映画教やから。さっさと帰ってくれ」

貞雄「ラグビー部で一年後輩の山中です」

正博「ラグビー部？」

貞雄「はい」

正博「そんな顔見たことないで」

貞雄「先輩は、花形のレギュラー選手やったけど、わしは補欠の補欠の補欠みたいなもんで、試合には全然でとりませんから、顔をおぼえてもらっとらんのです」

正博「ほんまか？」

貞雄「はい。パス！」

正博「えっ!？」

貞雄「パス！」

貞雄が投げる見えないラグビーボールを思わず受けとる正博。  
なぜか活弁士4もまじってパスをつなげていく。  
敵チームも出てきてのラグビーとなる。

正博「おう」

貞雄「はい先輩、パス！」

正博「おう」

貞雄「パス！」

正博「おうっ！」

貞雄「パス！」

正博「おうっ！」

活弁士4「京一商のウイング、マキノにボールが渡りました。マキノ、敵陣を切り裂いて走ります。まるで一陣の風のように！ マキノ、走る、走る！」

正博「トライ！」

活弁士4「逆転トライが決まった！ 京都一商、優勝です！」

正博「やったア！」

貞雄「勝ったッ！」

正博「思い出した、思い出した。おまえしやだおや！」

貞雄「そうです、ボール磨きのしやだおです！」

正博「おお、久しぶりやったな。で、わしになんの用や？」

貞雄「マキノに入れたってください」

正博「はあ」

貞雄「わし、活動やりたいんです」

正博「本気か？」

貞雄「へえ」

正博「活動屋は、大変やぞ」

貞雄「覚悟はできてます」

正博「変わったやつやな、おまえ」

貞雄「わし、ずっと先輩にあこがれとったんです。実はラグビーに入ったのも、先輩に少しでも近づこう思うてでした」

正博「なんや、おまえ、こつちか（と女形の手つき）。わしや、そつちの

気はないで」

貞雄「ちやいます、ちやいます」

そこにマキノ省三が来る。

省三「さつきから玄関先で、なんの騒ぎや」

正博「あつ、おやじ……」

貞雄「マキノ省三……」

省三「呼び捨てか」

貞雄「あつ、すみません」

活弁士4「いまでは日本映画の父とも呼ばれるマキノ省三。日本初の職業

映画監督であります。昭和二年のこのとき、まだ47歳。マキノ

プロの代表監督で、社長でございます」

貞雄「しっ」

正博「こいつわしのラグビーの後輩で山中ちゅう男なんやけど、マキノに

入りたい言うとるんです」

省三「マサの友達か？」

正博「いや……それほど付き合ってたわけやないけど」

省三「そうか……あんたマサとつきあつたらんかったということは、不良

やない、マジメちゅうことやな」

正博「なんやそれ」

省三「中学のおまえの友達は、不良ばっかやないか」

正博「まあな」

省三「あんた、なにができるんや」

貞雄「えっ!？」

省三「役者やりたいんやったら、なんか芸あるやろ」

貞雄「僕は役者になりたいんとちがいます。僕は映画の監督になりたいん

です」

省三「(笑い) あんさんが、監督に。そら、あかんな」

貞雄「なんですか!？」

省三「あんさんの顔や」

貞雄「顔!？」

省三「おもしろすぎる。そんな顔で監督されたら、役者が笑うて芝居にならん」

正博「たしかに」

省三「あんさん、役者になんはなれ。三枚目のええ役者になれるで」

貞雄「僕は監督になりたいんです！　お願いします！」

省三「そうか……もったいないのお。よしわかった。うちのマサ公のええ相棒になったってや。早速撮影所に来たらええ」

貞雄「ほんまですか」

活弁士4「やったじゃない」

省三「まずは台本のガリバンやって……あれが一番勉強になるねん。つま

らん仕事やおもたらできませんぜ」

正博「よかったな」

貞雄「先輩、ありがとうございます！」

省三「ほな、いこか」

活弁士4「かくして貞雄は、マキノにするりと入りこんだのであります！

山中貞雄映画修行のはじまり、はじまり！　ミュージックスタ

ート！」

## ○5場

『映画修行』（歌入り芝居となります）

貞雄（歌で）大好きな映画の、扉が開いた。夢の未来が見えてきた」

正博（歌で）そんなに甘い世界じゃないぞ。気合を入れて、覚悟決めて、  
行け！

省三（歌で）マキノ映画の基本はな、いちスジ、にヌケ、さんドウサ」

省三「これを守ってやってくれ」

一同（歌で）いちスジ、にヌケ、さんドウサ。いちスジ、にヌケ、さん  
ドウサ」

省三「ええか、スジはシナリオ、脚本、ストーリーや。脚本がよくなかっ  
たら、もうどうにもならん！」

正博「ヌケは、撮影のことや。すかっとヌケとる絵をとるんや！」

省三「最後がドウサ。役者の芝居のこっちゃ。わかったか〜」

正博「おもしろなきやあかんで！」

貞雄「はい、わかりました！」

一同（歌で）おもしろい映画をつくるため、お客を楽しませるために、活  
動屋は命をかける、それが男の生きる道」

ヨソとえいが入る。

ヨソ「(歌で) すえっこ貞雄が、仕事を始めた。心配で、心配で、たまらない」

えい「(歌で) 毎日大変らしいです。怒られてばかりで」

ヨソ「(歌で) 母親は心配しています。息子が、ちゃんと、やってるか」

ヨソ・えい「(歌で) 息子が、ちゃんと、やってるか」

正博・省三「(歌で) いちスジ、にヌケ、さんドウサ」

ヨソ「貞雄、遅くまで帰らへんけど、体は大丈夫なん？」

貞雄「ああ、大丈夫や。好きなことやってるんやから、体に悪いわけないやろ」

えい「貞雄さん、撮影所で昼行灯で言われてるそうやないですか」

ヨソ「なんで？」

えい「毎日、台本部の机に座って、ボートとしてるからやそうです」

ヨソ「それでお給金もらえるん？」

貞雄「ただボートとしてるんやないて。いまはわしはシナリオの修行中なんや」

ヨソ「シナ料理!？」

貞雄「ちやうよ。シナリオ、脚本のことや」

ヨソ「キヤクホってなんや？」

えい「おいしそー」

活弁士4「まもなく貞雄は、助監督になります。しかし、ここでもあいか  
わらずボートとしている昼行灯でございました」

正博「(歌で) おまえみたいに使えないのは、なかなかいいぞ」

貞雄「(歌で) これでもやってるつもりです」

貞雄「おおめに見てください」

ヨソ「(歌で) 息子よ、無事に、生きてくれ。りっぱな男になっとくれ」

正博・省三「(歌で) いちスジ、にヌケ、さんドウサ」

ヨソ・えい「(歌で) とにかく元気でいてほしい」

嵐長三郎(寛寿郎) が手に原稿用紙の束を持って来る。

嵐「社長、わしの鞍馬天狗が終わりになるってほんまですか？」

省三「長三郎はん、そろそろ天狗を卒業してもええでしよ」

嵐「わし以外に、鞍馬天狗ができる男がおますか？」

省三「あんさんほんまに天狗になっとるんとかうか？」

嵐「ほな、わしマキノ辞めさせてもらうわ」

省三「なんやて」

正博「長三郎はん、よう考えてください」

嵐「これからは自分の会社で好きなように作らせてもらいます」

省三「わかった。長三郎はんには、これまでよう稼がせてもらうたさかい

な。独立を許しまひよ。そのかわり、長三郎いう名前は、マキノのもんや、返してもらおうで」

嵐「名前は返します。そのかわり、この本を書いた社堂社汰夫いう男を、わしにください」

省三「社堂？ 誰や、それ？」

貞雄「わしです。わしが、その社堂社汰夫です」

嵐「えっ!? 昼行灯が、この本書いたんか？」

貞雄「へえ。昼間はブーツとしてますが、夜、こつこつ脚本書いとったんです」

嵐「よし。今日からわしは嵐寛寿郎や。しゃだおは嵐寛寿郎プロダクシヨ

ンの脚本家件助監督に任命や！」

貞雄「エーッ！」

嵐「(歌で) 歌舞伎の世界を飛び出して、活動写真で、大立ち回り。あつ

というまに大スター。わしが天下のアラカンや。情けに厚くて、

世話好きで、涙もろくて女好き、別れるたびに無一文、わしが天

下のアラカンや」

貞雄「(歌で) 天下のアラカン、いい人だけど、金の勘定もアラカンで、

現場はボウボウ火の車」

嵐「気合や、気合や！」

活弁士4「(歌で) 気合だけでは」

一同「(歌で) 気合だけでは」

活弁士4「(歌で) につちもさつちもいきません」

一同「(歌で) 気合だけでは、につちもさつちもいきません」

活弁士4「希望に燃えて船出したアラカンの寛プロは、あつというまに沈没寸前とあいなるのでございました」

ロケ現場。

立ち回りが終わり、決めポーズをする嵐。

レフ板で光を当てている貞雄。

正博と省三だった役者は、スタッフの監督の城戸とカメラマンの藤井になる。

城戸「カット！ おつかれさまでした」

貞雄「腹へった……」

藤井「情けない声だすな、助監督」

貞雄「そやかて、なんも食うとらへんのですよ」

藤井「みんな同じや。気合でがんばれ」

貞雄「不思議なことに、なんも食うとらんでも、屁はでよる」

藤井「へー」

貞雄・藤井「笑えんなあ」

嵐「ちょっとみんなに聞いてくれ。紹介したい人がおる。こっちに」

小夜がくる。

嵐「昨日、みんなも知ってのとおり、女優の一人が男と逃げよった。そこで京都から急きよ新人の浅井小夜さんに来てもらうた」

貞雄「あ……」

小夜「お願いいたします」

嵐「よろしうしてやってくれ」

藤井「なんや知っとるんか？」

貞雄「あ、うん」

藤井「ほう」

城戸「おんたい、ちよつとお話があるんですけど」

嵐「おう、なんや？」

城戸「おあしのほうが無くなりました」

嵐「全然か？」

城戸「へえ。おんたいのブロマイドを全員で売り歩きましてフィルム代はなんとかかき集めましたけど、たまりにたまっとる宿代がおまへん」

嵐「そうか……アラカンもさすがに、こりやイカン」

城戸「はあ」

嵐「ここは笑うとこやろ」

小夜、片づけをしている貞雄の元に行く。

小夜「お久しぶりです」

貞雄「びっくりしたで。女優さんやて」

小夜「はい」

貞雄「どうやって……」

小夜「大河内先生のところ、壺のお札を言いに行ったんです。そしたら先生が、壺は偽物やった、わしやだまされた。かわりにあんた活動に出なはれっておっしゃって。こういうことに」

貞雄「そっかあ」

小夜「歌で」永遠に朝が来ない、そんな気がしてたあの頃、生きることの意味さえも、わからなくなっていたの。そんなとき、あなたに出逢った。ひとすじの光のように、私を照らした。夢を語るあなたは、誰よりも輝いて、あなたの夢に私の夢を重ねてみたの」

小夜「歌で」映画に出たら、いつかあなたに会えると思ってました」  
貞雄「……………」

小夜「やっと会えました」

貞雄「……………」

小夜・貞雄「(歌で) 映画が、ぼくら二人を出逢わせてくれた。映画がぼくら二人をつないでる」

藤井「いきなりロマンスか。しゃどやん、わしらが作っとるのは、チャンバラやで！」

嵐「みんな、あと少しの辛抱や、きはっていくでー！」

嵐「(歌で) おもろい映画をつくるため、お客を楽しませるために、活動

屋は命をかける」

一同「(歌で) それが男の生きる道」

城戸「(歌で) 金がないなら工夫で勝負、セツトは少なく、できればなしで」

藤井「(歌で) 無許可の撮影、オールロケ。警察来たなら、そく逃げる」

貞雄「(歌で) 旅館の払いは、あとまわし。どうにもだめなら、夜逃げす

る」

一同「逃げる！」

小夜「(歌で) ムチャクチャだけど、楽しくて、いつも笑いがとまらない」

一同「(歌で) おもろい映画をつくるため、お客を楽しませるために、活動

屋は命をかける。それが男の生きる道」

嵐「すまん、みんな。ほんまに夜逃げせにやらんようになってもうた」

一同「えーっ！」

嵐「捲土重来、かならずわしは復活する。そんなときはみんなをまた呼ぶさ

かい、頼む！ 寛プロは、これにて解散や」

重々しい地鳴りのような音がする。

活弁士4 「1927年、日本軍は日本人保護を名目に、山東出兵。192

8年、張作霖爆殺事件。軍部の勢いはますますばかり。1929年、

世界恐慌始まる！」

浪人生活で汚くなった貞雄が、ふらりと山中家に戻ってくる。

貞雄「お母ちゃん、お母ちゃん……」

えい「貞雄さん、どないしはったん」

貞雄「腹減った……」

えい「いま何かさえてきますわ。お母さん、貞雄さんが！」

ヨソ「えっ！ なんやて。ああ、とにかくあがり、あー、こんなに汚れて」

貞雄「わし、浪人になってしもた。武士は食わねど、たかようじって、あ

れ嘘やな。やっぱ食わんとあかん」

ヨソ「首になっただんか？」

貞雄「ちやう、つぶれた。寛プロ、つぶれよった」

えいが、にぎり飯を持って来る。

貞雄は一心に飯を食う。

えい「これからどないしはるんですか？」

貞雄「しばらくやっかいになります」

えい「えー。貞雄さんの部屋は、道子がつこうてますよ」

貞雄「道子にいそうろうさせてもらえませんかね」

えい「それはええですけど」

貞雄「なんやわし不思議な気持ちなんや。ぜんぜん落ちこんだりしとらん

のです。仕事がのうなつたくせに、なんか前途洋々みたいな、よ

っしゃーって、そんな感じなんです」

ヨソ「あたまがおかしくなつたんと違うか？」

貞雄「きつと活動写真にはまりすぎて、おかしくなつたんでしよな」

えい「あー、どないしよ」

ヨソ「こまりましたなア」

貞雄「きつと、命をかけられるもんを見つけたからかもしれまへん。目指

すもんがあるつちゆうのは、ええもんですね」

ヨソ「なんやようわからんが。貞雄は元気やで」

えい「そうですな」

貞雄「まずはじっくりシナリオを書きますわ」

ヨソ「またシナ料理かいな。うちは、よう食べんで」

活弁士4「山中さん、速達ですよ」

ヨソ「貞雄、あんたにやで」

貞雄は、はがきを読む。

貞雄「アラカンのおんたいからや……時節きた、再起や、今度はあんたが

監督や、おいで……よっしゃあ！」

ヨソ「どないしたん!？」

貞雄「おかあちゃん、わしついに監督や！」

ヨソ「カントク？」

貞雄「そや！」

えい「なんですか、それ？」

貞雄「わしが一番やりたかつたもんや！」

貞雄「歌で」 ついにチャンスがきた、自分の映画をつくるんだ。いまま

でためこんだ、エネルギーは爆発寸前、一気に爆発させてやる、

ドンドンドカーンとやってやる」

一同「歌で」ドンドンドカーンとやってみろ」

貞雄「歌で」夢のステップふんで、自分の未来をひらくんだ。全力疾走、

もうだれにも止められはしない、一気に走り抜けてやる、ドンド  
ンドカーンとやってやる」

一同（歌で）ドンドンドカーンとやってみろ」

活弁士4「再起した寛プロで、ついに貞雄は監督に昇進したのであります  
！ ときに1931年、昭和6年12月。そうです、オープン  
グのシーンは、初監督映画の撮影現場でした！ ウワァッ！」

と、活弁士4は斬られて、倒れる。

駆け寄る小夜。

撮影する貞雄とカメラマンの藤井。

小夜「勘太さん！」

活弁士4「お露さん！」

小夜「しつかり、勘太さん」

活弁士4「わしは、もうだめや……」

そこに駆け寄る嵐。

嵐「勘太、握ってくれるな、こりやあお露さんの手だ。お露さんの置き土

産に、にっこり笑って死んで行きな」

活弁士4「ありがてえ、お露さん……」

嵐「勘太！」

小夜「勘太さん！」

嵐、ゆっくりと歩き去る。

貞雄「まっすぐ、まっすぐ、歩いて行くんや！」

貞雄（歌で）夢のステップふんで、自分の未来をひらくんだ。全力疾走、

もうだれにも止められはしない、一気に走り抜けてやる、ドンド

ンドカーンとやってやる」

一同（歌で）ドンドンドカーンとやってみろ」

活弁士4が滝沢英輔となる。

ここは鳴滝駅の前。

滝沢「こまった、こまった、こまった……」

貞雄「どないしたんや滝沢ケンぼう」

滝沢「マキノがつぶれよった」

貞雄「なんやて」

滝沢「省三はんが亡くなったあと、正博はんががんばってはったんやけど、

やっぱりあかんかった」

貞雄「あかんかったか」

滝沢「わしもせっかく監督になれたと思うたのに、失業や」

貞雄「そうか」

滝沢「わしだけやない、マキノにいた連中は、みんなパーや」

活弁士3が、三村伸太郎になる。

三村「ほんまパーです」

滝沢「こっちはマキノ文芸部に入ったばかりやった脚本家の三村伸太郎」

三村「三村です。いまは滝沢さんの家に居候させてもらってます。せっか

く脚本家の仕事にありついたらと思ってたのに、かないませんわ」

貞雄「そりや、困りましたな」

活弁士5が、監督の稲垣浩になる。

稲垣「なんや、なんや、むさい顔つきあわせて。しやどやん、ケンぼう、

久しぶりやな」

貞雄「稲垣さん」

稲垣「暗い顔して、どないした」

貞雄「ケンぼうたち、マキノつぶれて浪人なんですわ」

稲垣「そうかア」

活弁士7が、監督の鈴木桃作になる。

鈴木「わしも同じく浪人や」

貞雄「鈴木さん」

鈴木「なんとかならんかなあ」

滝沢「食うていかにやならんし」

三村「僕、結婚したばかりなんです」

滝沢「こいつ夫婦でわしの家に居候なんやで」

三村「すみません」

活弁士2が、脚本家の八尋不二になる。

活弁士6が、脚本家の藤井滋司になる。

八尋「おもしろい話しをしとるんやったら、うちらも仲間にいれたってよ」

貞雄「八尋さんに、藤井」

八尋「どっか飲みに行く、相談か？」

貞雄「そうやないんです」

藤井「監督が四人に、脚本家が三人もそろた。こんだけおりや、いくらでも映画つくれるな」

貞雄「そうや、いいこと思いついた！ みんなで脚本書けばええんですよ！」

一同「えっ!？」

貞雄「(歌で)一人よりも、二人、二人よりも、三人、仲間がいれば、面白くなる」

稲垣「(歌で)三人よりも、四人、四人よりも、五人、仲間がいれば、知恵も出てくる」

貞雄「(歌で)仕事をなくした友のため、仕事をつくるのも。そや仲間や！」

一同「(歌で)オーっ！ みんなで力をあわせれば、できないことなどありやしない」

滝沢「みんなでわしらのために脚本書いてくれるっちゅうんか!？」

貞雄「そうです。こんだけ脚本家や監督がおるんや、ええ脚本こさえて、それを手土産に寛プロに入って、撮りやええんですよ！」

三村「僕も寛プロに一緒に行かせてもらいます」

鈴木「わしの撮る作品のホンも書いてくれ」

三村「(歌で)五人よりも、六人、六人よりも七人、仲間がいれば、楽しくなる」

鈴木「(歌で)七人よりも、八人、すえひろがりめでたい、仲間がいれば、酒ものめる」

貞雄「(歌で)温泉行って、ババンバン、おおさわぎ、仕事も遊びも全力で」

一同「(歌で)みんなで力をあわせれば、できないことなどありやしない」  
八尋「アイディアはぎょうさんある。みんなで手分けしてやれば、一晩で

なんぼんも脚本かけるかもしれへんな」

藤井「一晩で何本もか、ワクワクしてきますね」

八尋「なんかおまえが言うと、ちよつといやらしいなあ」

藤井「そんなことないですよ」

貞雄「みんなでこれから旅館入って、酒でも飲みながら、脚本書きましょうよ」

鈴木「温泉ええなあ。でも、今わし金ないで」

滝沢「わしも」

一同「(歌で)仕事をなくした友のため、仕事をつくるのも仲間」

一同「(歌で)みんなで力をあわせれば、できないことなど、不安も、孤独も、ありやしない」

貞雄「脚本集団鳴滝組、結成や！」

一同「イエーイ！」

一同「(歌で)おもしろい映画をつくるため、お客を楽しませるために、活

動屋は命をかける。それが男の生きる道」

貞雄と活弁士4を残して、他の役者たちは去って行く。

## ○6場

活弁士4「やりましたね山中さん。第一回監督作品『抱寝の長脇差し』につづいて、二作目の『小判しぐれ』、三作目の『小笠原老岐守』とヒットの連発で、快進撃ですねー。おかげさんで活弁士のわたしも大忙しですよ」

貞雄「そりゃ、よかったな」

活弁士4「そうそう。わたしつい最近、フランク・キャプラ監督の『或る夜の出来事』っていうアメリカ映画を見たんですけど、すごく面白かったです」

貞雄「おまえも見てたか。あれにはやられた。ちくしょう！ いいよな、

オールトーカーだし。セリフも粹だし、音楽もいい」

活弁士4「ああいうの撮ってくださいよ」

貞雄「もちろんいつか撮るさ。撮ってみせるさ、アメリカの監督より面白いやつをな」

活弁士4「かつこいいい！」

貞雄「(決めポーズで) 誰よりもおもしろい映画を撮ってごらんにみせまするう！」

活弁士4「いよ、アゴナガ屋！」

貞雄「アゴナガ屋でなんや」

ヨソがお盆にお茶とお菓子を乗せて持ってくる。

山中家・貞雄の部屋である。

文机に書きかけの原稿用紙がひろげている。

ヨソ「どうかしたの貞雄？」

貞雄「あつ、おかあちゃん」

ヨソ「一人でぶつぶつなに言うてるん？」

貞雄「いや、いまこいつと……あ……すまん、うるさかった？」

ヨソ「そやないけど、あんまり遅くまで夜なべは、体に悪いで」

貞雄「わしはこれでも甲種合格、一年間の兵役を終えた予備役の伍長です。体は頑丈にできてます。おかあちゃんのほうこそ、もうええ

歳なんやさかい、大事にしてくださいよ」

ヨソ「シナ料理はすすんどるんか？」

貞雄「料理には仕込みが大事やから」

ヨソ「けんど、アラカンさんのとこ、やめたそうやないか？」

貞雄「はい……」

ヨソ「アラカンさんには、お世話になったんどちがうんかい」

貞雄「うん」

ヨソ「恩を仇で返すようなまねだけはしたらあかんよ」

貞雄「わかつとる」

ヨソ「それならええ」

貞雄「わし、早くトーキーがやりたいんや。だからわし、日活に移ること

にしたんです」

ヨソ「シナ料理とカントクの次はトーキー？ なんやのそれ？」

貞雄「おかあちゃん、これからの活動写真は、喋るんやで」

ヨソ「そんなアホな。シャシンが喋るかいな」

貞雄「ほんまやて」

活弁士4「もうやつてます。僕見てきました」

貞雄「おまえは黙っとれ」

ヨソ「なんやて」

貞雄「あ、いや、おかあちゃんのことやない。トーキーちゆうのは、音の

出る映画のことや」

ヨソ「音の出る映画」

貞雄「そや」

ヨソ「おもしろそうやね」

貞雄「そやろ。こりやもうやるしかないやろ」

ヨソ「おもしろかったら、やるしかないわな」

貞雄「やっぱり、おかあちゃんは話がわかるわ」

ヨソ「映画がしゃべるようになったら、活弁士はんは、いらんようになる

やない」

活弁士4「えっ!？」

貞雄「いまはまだトーキーははじまったばかりやけど、いずれ映画は全部

トーキーになるやろ。そしたら活弁士はいらんようになる」

活弁士4「そんなあ。じゃあ、わたしらご用済みですか？」

貞雄「しゃあないな」

活弁士4「どうしよう。あー、失業だあ」

貞雄「仕事さがさなあかんな」

活弁士4「そうですね……」

貞雄は、ヨソの肩をもむ。

ヨソ「おまえの仕事がいらんようになることはないんか？」

貞雄「映画がどんなに進化しても、ホン屋とカントクはいるやろな」

ヨソ「ほな、おまえは失業せんでええんやな？」

貞雄「ああ。映画がある限り、わしの仕事はある」

ヨソ「よかった。おまえは、運がええな」

活弁士4「運がない……」

貞雄「映画が無くなったら、パーやけど」

ヨソ「映画さまさまや」

貞雄「さまさまや」

活弁士4「僕はどうしたらいいんですか？」

貞雄「なんとかなるやろ」

活弁士4「なんとかなるかなあ」

ヨソ「呑気やなあ、ほんまにおまえは」

貞雄「あ、いや」

ヨソ「おまえみたいな子に、お嫁さんに来てくれる人おるんかねえ」

貞雄「嫁？」

ヨソ「うちに、かわいいお嫁さんを早く見せておくれ」

貞雄「それは当然無理や」

ヨソ「ええ人は、おらんの？」

活弁士4「小夜さんのことが好きなくせに」

貞雄「なに言うんや！」

ヨソ「怒ることはないやろ」

貞雄「あ、ちがうんや。おかあちゃんに言うたんやない」

活弁士4「小夜さんとは、どうなってんの？」

貞雄「しらん！」

ヨソ「どないしたん？」

貞雄「なんでもないて」

活弁士4「へえ、失恋したのね。かわいそう。仕事さがしにいこ」

貞雄「がんばりや」

ヨソ「この子は、ほんまに大丈夫かいな」

貞雄「おかあちゃん、ちいそうなたな」

ヨソ「うちは幸せもんや。監督さんに肩もんでもろうて」

貞雄「まだまだや、わしは。東京には、わしよりもっとすごい監督がおる」

暗転。

## ○7場

本牧キヨホテルのバー。

昭和9年。春。

カウンターとテーブルと椅子がある。

軽やかなピアノ曲が流れる。

マダムの美夜子がスタンダード曲を歌っている。

それを聞いている貞雄と三村伸太郎（35）。

美夜子の歌が終わり拍手する貞雄と三村。

美夜子「お二人さん、キヨホテルははじめて？」

三村「はい。キネマ旬報の岸さんに紹介されました」

美夜子「ああ、岸さんのお友達ね。何をお飲みになります？」

三村「ぼくは、ウイスキーを。おっさんはどうする？」

貞雄「わしも同じもんを」

美夜子「ウイスキーお願い。関西の方？」

貞雄「京都です」

美夜子「あたし京都大好き。岸さんのお友達ってことは、映画やってらっしゃるの？」

三村「はい。僕は脚本家の三村といいます。で、こっちは監督の山中です」

美夜子「へえ、お二人ともお若いのに偉い先生なんだ」

三村「先生なんて持ち上げるのは、いい役もらおうと思ってるダイコン役者だけですよ」

給仕がウイスキーのグラスとボトルを持ってくる。

グラスにウイスキーを注いで、二人に渡す美夜子。

美夜子「どんな映画をつくってらっしゃるの？ センセイ」

三村「時代劇です」

美夜子「京都は時代劇。松竹蒲田は現代劇でしたね」

三村「おくわしいんですね」

美夜子「これでも映画スターを夢見たこともありましたの」

三村「マダムだったら、いけたんじゃないですか」

美夜子「お世辞がお上手ね」

三村「とんでもない」

小津安二郎（32）が入ってくる。

美夜子「いらっしゃい」

小津「ひさしぶりです」

美夜子「あら、小津さん」

小津「どうも」

美夜子「ごぶさたね。お忙しいんですよ」

小津「帝劇でやる実演の演出を引き受けてしまっただね」

美夜子「見に行きたいわあ」

貞雄「はじめまして、山中貞雄です」

小津「すぐにわかりました。小津安二郎です。はじめまして」

貞雄「こっちは一緒に仕事してる、三村伸太郎です」

三村「はじめまして」

小津「岸君からあなたが来てるって聞いて、飛んできましたよ」

貞雄「ありがとうございます。こっちにきたら、小津さんにはどうしても

会って行きたかったのですね」

小津「僕もあなたに会ってみたいと思ってきました。鼠小僧見させてもらい

ました。いい出来だと思います」

貞雄「小津さんにほめてもらえると、うれしいな」

三村「残念ながら僕の脚本じゃありませんけど」

小津「僕は三村さんが舞台の脚本を書かれてるところからお名前は知ってま

した」

三村「光栄です」

美夜子「センセイたち、まずは乾杯からでしょ」

小津「まったくくだ」

美夜子「小津さんもウイスキーね」

と、グラスを用意する。

貞雄「今日は、来てくださってありがとうございます」

小津「こちらこそお招きにあずかり、感謝します」

三村「東西の俊英監督の出会いに、乾杯！」

一同「乾杯」

暗転。

ボトルの数が増えている。

すっかり酔って大騒ぎしている貞雄、三村、小津。

貞雄と小津は意気投合。抱き合ったりしている。

三村「小津さん、去年のキネマ旬報のベストテン第一位『出来ごろ』お

めでとうございます！」

小津「ありがとうございます！でも僕は、ああいうベストテンとかいうのは、まっ

たく信用してないけどね」

美夜子「どうして？」

小津「あれは批評家たちの好みだよ」

貞雄「いや、出来ごろは、傑作です。下町に生きる人たちの人情がスク

リーンからにじみ出すようで、僕は大好きです。あれはいい」

小津「山中くんが、そう言ってくれるのが、なによりうれしいよ僕は」

貞雄「なんどでもいいですよ、あれはいい」

小津「きみの『盤獄の一生』も良かった。すいか泥棒のシーン、すいかをラグビーのボールに見立ててのおいかけっこ。あれには笑った。

そしてなにより大河内伝次郎の演じた阿地川盤獄は、僕がいままで映画で出会った人物の中で、一番きもちいい人物でした」

貞雄「そうですか」

小津「そして、やっぱりきみは思ってた通り、盤獄みたいにきもちのいい男だった」

貞雄「うれしいなあ」

市太郎が入ってくる。

外を気にしている市太郎。

市太郎「ごめんよ」

美夜子「直さん」

市太郎「よお」

美夜子「めずらしいわね、お一人」

市太郎「ああ。部屋はあいてるかい」

美夜子「あいてるけど、どうかしたの？」

市太郎「なんでもねえよ。おれを訪ねてくるやつがいても、おれはいないって言ってくれ」

美夜子「わかった……」

貞雄「兄さん？」

市太郎「えっ!？」

貞雄「市太郎兄さん……」

市太郎「貞雄か？」

貞雄「兄さん」

市太郎「貞雄」

貞雄「なにしてるんですか、こんなところで」

市太郎「おまえこそ」

三村「ほんまに、この人おまえの兄さんなんか？」

貞雄「ああ。博打打ちで行方不明のあにきがいるって言ってたろ」

小津「ひさびさの兄弟再会が、本牧のチャブ屋とは劇的すな」

市太郎「貞雄、おまえも大人になったなあ。こういうところで遊べるようになったんやから」

貞雄「ふざけんといってください。兄さん、なんで連絡せんのです。おかあちゃんなんも言わんけど、兄さんのこと、ずっと心配してるんですよ」

市太郎「連絡できない事情もあるんだよ」

美夜子「直さんて、ほんとは市太郎さんだったの？」

市太郎「ああ。でも、今は飯田直輔だから」

貞雄「偽名使つとるんですか？」

市太郎「事情があるって言ったろ」

小津「事情の話はあとにして、まずは一杯やりましょう。兄さん」

市太郎「この人らは？」

三村「山中の友人の三村伸太郎です。こちらは小津さんです」

市太郎「小津って、もしかして小津安二郎？ あの松竹の監督の」

小津「はい」

市太郎「貞雄、おまえも偉くなったなあ。こんな大監督と肩をならべて酒を飲めるようになったとは、あにきのおれも鼻が高いぜ。今日は、パーツといこうぜ。パーツと」

と、小津と乾杯してピアノ前で、『蒲田行進曲』を歌いだす

市太郎。小津も一緒に歌う。

三村「なんか調子のいいアニキだな」

貞雄「ああ」

歌い終わって戻ってくる小津と市太郎。

小津「なるほどね……」

美夜子「小津さん、なに感心してんのよ」

小津「山中くんの時代劇の登場人物が活き活きしてるのは、こういうお兄

さんがいるからなんだなって思ってたね」

市太郎「そう思いますか、大監督」

小津「ええ」

市太郎「おれも、貞雄の撮った活動写真を見るたびに、博打打ちのヤクザのモデルは俺なんじゃないかって思ってたんですよ」

貞雄「ちがうよ！」

市太郎「恥ずかしくがらなくてもいいんだよ。おれは嬉しいんだからさ」

貞雄「ちがうって！」

市太郎「まあまあ」

外をうかがっていた市太郎が、美夜子に耳打ちして奥に消える。

特高警察の刑事が入ってくる。

じろじろと店内の客の顔を見て歩く刑事。

ピアノの音が止まる。

美夜子「ご用ですか、刑事さん」

刑事「飯田直輔が来てるだろ」

美夜子「そんな人、聞いたことありませんね」

カウンターを叩く刑事。

刑事「隠し立てすると、ろくなことにはならねえぜ」

美夜子「あたしが嘘をついてるとでもおっしゃるんですか」

刑事「来てるのはわかってるんだよ」

美夜子「知らないもんは、知らないんだよ！ このとうへんぼく！」

刑事「このバイタ。しょっぴくぞ、こらっ！」

小津「まあまあ、刑事さん。そうかつかしいで」

刑事「なんだ、きさまは」

小津「松竹で監督をしとる小津というもんです」

刑事「松竹？ あの蒲田撮影所の松竹か？」

小津「はい」

刑事「小津って……あの小津安二郎……さんですか？」

小津「はい」

刑事「小津さん」

小津「なんでしょう」

刑事「いつも見えます。あなたの映画」

小津「ありがとうございます」

刑事「お嬢さん、東京の合唱、生まれてはみたけれど、青春の夢いまいず

こ、どれもよかったなあ」

三村「刑事さん、相当の映画好きだね」

刑事「いやあ、無粋な話をして、悪かったですな。失敬、失敬。今日は、

いい日になりました。失礼します」

貞雄「ちよっと待ってください」

刑事「なんでしょう」

貞雄「さっきの男、飯田直輔とかいうやつは、どういう嫌疑をかけられて

いるんですか？」

刑事「アカですよ。ヤクザのくせに、アカの手先をやってるんで」

貞雄「……………」

刑事「監督さんたちでも、アカは容赦はしませんよ」

小津「僕はシロが好きだよ」

刑事「それがいいっす。あ、小津さん。田中絹代のサインをもらっていた

だけないですかね」

小津「いいとも。ここにおいとくよ」

刑事「よろしくお願いします」

と、去って行く。

市太郎が戻ってくる。

市太郎「どうも、どうも、どうも。さすが日本代表の監督さんたちだ、芝居もうめえや」

いきなり市太郎を殴る貞雄。

市太郎「なにすんだよ」

貞雄「兄さんこそ、なにやってんだよ！」

と、市太郎につかみかかる。

市太郎「落ち着け、落ち着けたら！」

小津「やめたまえ、二人とも！」

三村「山中！」

市太郎「誤解だよ！」

小津と三村が割って入る。

美夜子「さあ、一杯飲んでからにしてください」

グラスを一気にあおる貞雄。

貞雄「連絡できない事情って、このことだったんかい」

市太郎「そうや」

三村「ほんまにアカなんですか？」

市太郎「アカとか、シロとか、なんやわしにはようわからん。ただ、あいつらがわしのこと、かつてに決めつけとるだけや」

美夜子「直さんみたいな遊び人が、アカのわけないでしょ」

市太郎「なあ」

小津「わけを教えてください」

市太郎「何年か前、バクチで大儲けしたのさ。そんときのバクチ仲間におもろいやつがおって、わしはそいつと意気投合して、兄弟の杯をかわしたんよ。あぶくぜにをたんと持とったから、そいつに金も貸してやった。それだけのことよ」

小津「それだけのことで、特高につけまわされることはないでしょう」

市太郎「それだけのことよ」

三村「誰に金を貸したんですか？」

市太郎「小林多喜二ちゆうやつや」

貞雄「小林多喜二……」

三村「こないだ特高に殺された、プロレタリア作家の小林多喜二か」

市太郎「あいつは頭のええ、母親思いのおもろいやつやった」

貞雄「ほんまか、ほんまにそれだけのことなんか」

市太郎「わしが共産主義とか、そういうことわかるわけないやろ。ただあの小林とか、その仲間が言うことは間違いやないと思う。わしは難しいことはようわからんが、あいつは悪いことをするよくなやつやない。悪いことをしたらんやつを、捕まえるつちゆうことは、警察が悪いことしとるんや」

小津「お兄さん、あんたはえらい」

三村「わしもそう思う」

市太郎「おおきに、おおきに」

三村「もう一杯いきましよう」

市太郎「おうっ」

小津「山中君も、飲もう」

貞雄「ええ」

美夜子「はい、どうぞ」

市太郎「みなさんがたには、ご迷惑をかけて、すみませんでした」

三村「いえいえ、とんでもない」

小津「面白かったですよ」

市太郎「貞雄、わしがこんなことになつとることは、お母ちゃんには絶対に言うたらあかんで」

貞雄「言うわけないやろ」

市太郎「わしは、大丈夫やから」

美夜子「でも直さん、これからどうするのさ？」

市太郎「大陸に行こう思うとる」

貞雄「大陸に」

市太郎「わしみたいなのが、有名な映画監督のアニキやてお上にばれたら、おまえも仕事やりずらくなるやろうしな」

貞雄「そんなこと……」

市太郎「それにわしみたい男には、日本は狭すぎるんや。今度はむこうで大バクチャ」

三村「しかし大陸では戦争がはじまっていますよ」

小津「関東軍が暴走しとる」

市太郎「どつちが勝つか、戦争もバクチャ。あんじょう切り抜けてみせるわ」

貞雄「兄さん、さつきはすまん」

市太郎「気にせんでええ。みなさんこの店の勘定は、ぜんぶわしが持ちますから、今日は、たっぷり遊んで行ってください。マダム、これで頼む」

と、美夜子に財布を渡す。

美夜子「直さん、死んじゃだめよ」

市太郎「ああ」

貞雄「兄さん……」

市太郎「貞雄、一つおまえに言っとくことがある」

貞雄「え」

市太郎「おまえはまじめすぎる。もっと遊べ」

貞雄「遊べ？」

市太郎「映画を見たら、よーわかる。もっと女と遊んだほうが、ええ映画

が撮れるようになる」

貞雄「うん」

市太郎「それから、元気だな。あばよ」

と、去って行く。

小津「まさに風のような人でしたな」

三村「ええ」

小津「せっかくお兄さんの気づかいを無駄にするわけにはいかん。遊んで

行きましよう」

三村「そうしましょう」

曲にあわせて美夜子は小津と踊る。

小夜に良く似た女が現れる。

貞雄の前に立つドレスの女。

女「踊りましょ」

貞雄「……………」

三村「踊ってこいよ」

踊る貞雄と女。

貞雄「きみによく似た人を知ってた」

女「初恋の人でしょ」

貞雄「え……」

女「よく言われるの」

小津と美夜子が去って行き。

三村は酔いつぶれる。

いつしか部屋は、ホテルの個室になっている。

踊りながら、女の服を脱がしていく貞雄。

ふたりはもつれあうようにベッドのシートにもぐりこむ。

女「どうしたの？」

貞雄「いや……」

女「しないの？」

貞雄「……………」

女「あたしは、どうでもいいけど」

貞雄は女を抱く。

三村の声「山中、起きとるか？」

貞雄「ああ」

三村の声「入るで」

三村が入ってくる。

三村「撮影所から電話で……………」

貞雄「どないしたんや？」

三村「お母さんが、倒れた」

貞雄「えっ!？」

暗転。

## ○8場。

若やいだヨソが立つ。

ヨソ「貞雄は飛んで帰ってきて、一生懸命看病してくれたんやけど、その  
かいもなくわたしは死んでしまいました。享年67歳。貞雄のト  
キー映画は、ついに見ずじまいです。ほんと残念。でもわたしの  
人生はなかなかのもんだったと思ってます。息子たちも立派に育  
ってくれたし、貞雄は、活動写真でわたしを楽しませてくれまし  
た。次男の市太郎のことだけが、心残りではありましたが。わ  
たしが死んでまもなく1936年、昭和11年2月、東京では2  
26事件が起きました。陸軍の青年将校たちがクーデターを起こ  
そうとした事件です。この年の貞雄は、あいかわらず絶好調。『  
怪盗白頭巾』『河内山宗俊』『海鳴り街道』とたてつづけにト  
キー映画を作ります。はためからみたら順風満帆に見えた貞雄で  
したが、実はひそかに悩んでいたようなのです」

居酒屋。

テーブルについて酒を飲んでいる貞雄と三村。

むっつり飲んでる貞雄。

幽霊となったヨソもかたわらにいる。

三村「どうかしたのか？」

貞雄「なんでもない」

三村「いつまでもお母さんのこと悔やんでもしょうがないやろ」

ヨソ「そうよ、死んじゃったもんは、どうしようもないんだから」

貞雄「ちやいます」

ヨソ「あら、そうなの」

三村「なら、なんなんだよ？ さっきから、ずーつとしんきくさい顔して」

貞雄「わいもうあかんねん」

三村「はあ!？」

酒をおおる貞雄。

貞雄「仕事はある。金も不自由しとらん」

三村「結構なことじゃないか」

貞雄「でも、あかんねん」

三村「なにが!？」

貞雄「これでええんやろか」

三村「え!？」

貞雄「これでええんやろか」

三村「批評家たちの言うことなんか、気にしなきゃいい。俺たちの仕

事は、あいつらを喜ばすことじゃない。お客さんたちを喜ばしや

いいんだから」

ヨソ「そうよ、そうよ」

貞雄「……三村さん、わし日活やめて、東京に行こう思ってます」

貞雄「もうPCLと話をつけてきました」

三村「そういうことか」

ヨソ「えーっ、貞雄、東京に行くのかい。うち京都から外に出たことない

のに」

貞雄「東京で、一からやりなおそう思ってます。これが山中貞雄の映画やと

いうやつをつかみとらなあかんと思うとるんです」

三村「お前の気持ちは、わかった」

貞雄「三村さん、餞別代わりに、本を書いてくれませんか」

三村「……………」

貞雄「前進座が、写真の芝居やっててすごくいいんです。わし彼らと一緒に

にやろうと思えます。原案は、髪結新三で、三村さんが自由に書いてください」

三村「まかせといってくれ」

貞雄「お願いします」

三村は去って行く。

貞雄は歩きだす。

東京の街路。

ヨソは貞雄と一緒に東京の町を見て歩く。

ヨソ「はあ、やっぱり銀座はすごい人やねえ。こんなに人が歩いとると、どこかに市太郎がいるかもしれんねえ。わあ、ようかんが一杯ならんぞ。ここがとらやか。作次郎とえいさんに食べさせたいわあ。二人ともようかん大好きやったからねえ。夜の梅。ここがあの松阪屋さんですか。きれいな洋服がいっぱいならんぞ。ああ、あの青いセーター、喜与蔵に似合うやろねえ。おおつ、大きな時計やあ。ここが服部時計店ですか。きらきらしたもんがならんぞ。幸せそうなカップルが指輪えらんでは。ああ、ええなあ。貞雄もあんなふうにできたらええのにねえ。これが歌舞伎座かあ。りっぱやねー。今度歌舞伎見に行こな。貞雄、ありがとうねー。東京に連れてきてくれて。女の人たちもモダンやね。こらっ、これでれない。でも貞雄が元気になってくれて、ほんまうちうれしいわ。よかったな、貞雄。東京に来て。ほー、これがこれからお世話になる東京のスタジオですか。りっぱなとこやないの。みんな貞雄のこと監督さんや言うて大事にしてくれはるし、おまえは幸せもんやなあ。みなさん、おおきに、おおきに」

助監督となった岸松雄が分厚い原稿の束を持ってくる。

岸「山中さん！ 三村さんから脚本届きました」

と、脚本を貞雄に渡す。

紙風船が一つ降ってくる。

紙風船で遊ぶヨソ。

ヨソ「貞雄が東京で始めてつくる映画『人情紙風船』の撮影中に、満州では蘆溝橋事件が勃発しました。新聞は連日日本軍の快進撃を伝えます。貞雄はなにかを振り払うように、撮影に打ち込みました。そして映画はついに完成し、今日は試写会です」

昭和12年8月。

試写室のロビー。

一同から拍手をもらおう貞雄。

ヨソも嬉しそう。

貞雄「えー、みなさんの力が一つになり、人情紙風船が完成しました。本  
当にありがとうございます。いい作品にしあがったと自負してま  
す。今日は、こころゆくまでみなさんとうまい酒を酌み交わした  
いと思います。乾杯！」

一同「乾杯！」

岸「監督、おめでとうございます」

貞雄「なんとか封切りには、間に合った。よかった、よかった」

ヨソ「よかったな、貞雄」

岸「いやあ、まさに職人技でしたね。監督の中抜き技には感心させられ  
っぱなしでした」

貞雄「中抜きほめられても、あんまりうれしくないけどな」

岸「すんません」

貞雄「ええよ、ええよ」

岸「それでは、監督に花束贈呈！」

貞雄「えっ、なんや」

ヨソ「みなさん、おおきに」

岸「プレゼントは、京都からかけつけてくれたこの人です」

小夜が花束を持って現れる。

ヨソ「きれいな人やね」

小夜「おめでとございます」

貞雄「小夜さん……」

岸「日活で活躍中の女優さん、浅井小夜さんです」

拍手をもらおう小夜。

花束を貞雄に渡す。

貞雄「ありがとう」

小夜「おひさしぶりです」

貞雄「なんでキミが……」

小夜「岸さんが、どうしてもっておっしゃって」

貞雄「岸のやつ……」

岸「よけいなお世話でしたら、もうしわけない。小夜さんに会うの久しぶ  
りなんでしょ、今日はごゆっくり」

ヨソ「小夜さんて……昔うちに来た、あの子じゃない。あのときは、まだ子供だったけど、まあ、立派になって」

小夜「どうして連絡をくださらなかったの？」

貞雄「……………」

小夜「あたし、ずっと待っていました」

貞雄「だって、きみはアラカンさんの……」

小夜「もしかして嵐せんせいとなにかあったと思っただけじゃったの？」

貞雄「ちがうんですか？」

小夜「嵐せんせいにはずいぶん可愛がってもらいましたけど、それ以上の

ことはありません。あたしはずっと……」

貞雄「小夜さん」

小夜「あたし……」

貞雄「わしに、花は似あわんなあ」

ヨソ「なにいうとるん。貞雄、しゃきつとせな」

貞雄「赤城の山もこよいかぎりだ。おぼえてますか？ やっぱり、花は女

優さんがおうとる。小夜さん、これもとってください」

と、小夜に花束をおしつける。

そこに三村が来る。

三村「山中、話がある」

貞雄「ミムさん……」

三村「このシャシンは僕が書いた人情紙風船じゃない」

貞雄「本を少し直させてもらいました」

三村「少しじゃないだろ、これは」

貞雄「……………」

三村「たしかに、僕の書いたセリフが残ってはいる。しかし、まったくち

がう話だ。僕は庶民の希望を書いたつもりだ。だが、君はつらい

絶望の話にしてしまった」

貞雄「……………」

三村「どうして新三は殺されなきゃならない。どうして海野又十郎は死な

なきゃならない」

貞雄「あれしか考えられませんでした」

三村「やりたかったことはわかるさ。見ればな」

貞雄「すみませんでした」

三村「いい映画だ」

貞雄「みむさん」

三村「完成、おめでどう」

貞雄「ありがとうございます」

三村「こんど本を直すときは、一言言ってくれ」

貞雄「はい」

ヨソ「貞雄がご迷惑をおかけしました。ありがとうございます。三村さん」

給仕が電報を持ってくる。

給仕「山中さんに電報です」

ヨソ「はい」

岸「おう、こつちだ」

と、受け取る岸。さっと顔色が変わる。

貞雄「なんや？」

黙って貞雄に電報を渡す岸。

貞雄、電報を読むと、呆然と立ち尽くす。

ヨソ「どないしたん？」

小夜「なにかあったんですか？」

貞雄「招集です」

小夜「え……」

ヨソ「うそやろ」

貞雄「なんでこんなときに……」

三村「山中……」

貞雄「なんで……」

貞雄たばこを吸おうとするが、手がふるえて火がつけられない。  
い。

貞雄「ミムさんの本、かつてに直したバチが当たりました」

三村「もう言うな」

小夜「監督……」

貞雄「小夜さん」

小夜「待ってます。お帰りになるのを、わたし待ってます」

貞雄「……」

三村「……山中貞雄君の武運長久を祈って、万歳！」

岸「万歳！」

ヨソ「やめておくれやす」

三村・岸・給仕「万歳！」

ヨソ「やめて……」

三村「死ぬなよ、山中」

泣き崩れるヨソ。

○9場

軍服を着せられ、銃を押しつけられ行進する貞雄。

一緒に活弁士たちも行進する。

ヨソも行進する。

活弁士7 「シナ事変従軍記、山中貞雄。ついに旅立ちです。神戸駅元町を行進する」

活弁士4 「京都の駅前でバンザイを叫んだ人と、神戸の街頭でバンザイを叫ぶ人と顔色が違う」

活弁士2 「叫ぶ人の悲劇、叫ばれるやつ悲劇。喜劇かもしれない」

貞雄 「ひさしぶりやなあ、活弁士さんたち。それわしが書いてる従軍記やないか」

活弁士3 「毎日せんぎり大根とかんぴょうを食って、馬臭い船底に暮らす。狭くて手足を伸ばしては寝られない」

活弁士5 「ついに上陸。はじめてしなの土を踏む。いたるところに英国と日本の旗である」

活弁士6 「このあたりの土はほこりっぽくていかん。タバコがなくなると、よもぎの枯葉をきせるにつめて吸う」

活弁士4 「貨物列車に数十時間ゆられて、大連に到着。それから一カ月かけて南京に入城」

行進を止める一同。

貞雄 「軍隊生活も、映画のタネ集めにはなるかもしれん。しかしなあ、人殺しは映画の中だけでたくさんやで」

三村 「南京から、山中が手紙をくれました。三村さん。鉄砲のタマの音もいろいろあるよ。ヒュッというやつや、ヒューン、プスというや  
っ」

活弁士4 「前をかすめる弾丸、後方を、横を、頭の上をあるいは高く、あるいは低く、…みな音が違う」

活弁士7 「一度ならず、二度三度タマの下を潜ってきたんだから、国定村の親分ならずとも多少胸骨が出てこなきやならんはずだが」

活弁士5 「やはりタマの音を聞くと、あおくなつて首をすくめる。あさましかりける次第」

活弁士6 「甘いもんが食いたい。慰問袋の栗のキントンの缶詰にズイキの涙を流す」

活弁士2 「酒はますます強くなった。シナの地酒をガブガブと飲む」

三村 「酒でも飲まなければやりきれない毎日毎日だ。強くもなる。戦争に

来て少し頭が悪くなったようだ」

貞雄 「送ってもらった雑誌を見ると、みんなの活躍が書かれていて、くやしい。日本映画も、外国映画も、わしの知らない映画、わしの見てない映画ばかりだ。なんだかわし一人取り残されたようであんななくイライラしてきて一晩眠れなかった。早う帰りたい」

三村 「早う帰ってこいよ。しゃどやん、おまえのために次のホン用意してるから」

行進をする一同。

小津 「敬礼し」 小津安二郎伍長であります。山中貞雄伍長はおりますでしようか」

貞雄 「おっちゃん、戦争はえらいもんですなあ」

小津 「山中くん！」

貞雄 「おっちゃん！」

小津 「きみが召集された二週間後に僕も召集された」

貞雄 「よう、ご無事で」

小津 「お互い悪運は強いな」

貞雄 「こんなところで死ぬわけにはいきまへん」

小津 「ああ。死ぬわけにはいかん。僕たちが死んだら、日本映画がだめになる」

貞雄 「大きくでたな」

小津 「正直、映画が撮りたくてムズムズしてる」

貞雄 「わしも」

小津 「撮りたいなあ」

貞雄 「おっちゃん、帰ったら戦争のシャシン撮るか？」

小津 「戦争のシャシンは撮るつもりはないよ。きみは？」

貞雄 「わからん。でも、ギャグはだいぶたまったよ」

小津 「現代劇を撮るつもりなんだろ」

貞雄 「さあ……」

一同の行進がはじまる。

小津 「もう行かなきゃならん」

貞雄 「そうですか」

貞雄 「小津さん。今度会うとき、わしの次のシャシンのホンを読んでくだ

さこ」

小津 「今度会うのは、東京だ」

小津は行進に飲まれていく。

活弁士7 「遺書。陸軍歩兵伍長としては、これ男子の本懐、申し置く事ナシ」

活弁士3 「日本映画監督協会の一員として一言。『人情紙風船』が山中貞雄の遺作では、チトサビシイ。負け惜しみに非ず」

活弁士2 「保険の金は、そっくり井上金太郎氏にお渡しする事」

活弁士5 「井上さんには、とことんお世話をかけて済まんと思います。僕のもろもろの借金を払ってください」

活弁士6 「ずいぶん足りません。そうまくごまかしていただきます」

活弁士4 「万一あまりましたら、協会と前進座で分けてください」

貞雄 「最後に、先輩、友人諸氏に一言。よい映画をこさえてください。昭和十三年四月十八日。山中貞雄」

激しい砲弾と銃弾の音。

声にならない声をあげて突撃する貞雄。

突撃する活弁士たち、次々と倒れていく。

貞雄 「カット！ カット！ なんや、このシャシンは。こんなんは、わしが撮りたいもんやないで！ わしは、こんな戦争のシャシンが撮りたいわけやない。おまえら、おきんかい！ ほら、おきろ。わしはもつとあつたかくて、いきいきとした人間が、ニッコリ笑おうとするシャシンが撮りたいんや！ おまえら死んだる場合やないで！ おきんかい！ おきんかい！ おきんかい！ あいたア、腹が……いたた……こりや、かなわんで……あいたア」

貞雄もついに倒れてしまう。

ヨソが起き上がる。

ヨソ 「貞雄……貞雄、朝やで。そろそろ起きたら、どうや」

貞雄 「わし、もうちよい寝ときたいんやけど……あ、お母ちゃん」

ヨソ 「貞雄」

貞雄 「わし、死んだんか？」

ヨソ 「そやな」

貞雄 「そうか……」

ヨソ 「なんや、せっかくうちに会えたんやで。もつと喜ばんかい」

貞雄 「お母ちゃんに会えたんは、そりやうれしいけど、わしほんまはまだ死ぬつもりなかったんや」

ヨソ 「そやろな。まだお嫁さんももうとらんしな」

貞雄 「やり残したことが、まだぎょうさんある」

ヨソ 「わかるで」

貞雄 「もっと映画が作りたかったよ」

ヨソ 「うちは、充分楽しませてもらうたよ」

貞雄 「もっとおもしろい映画が作れたはずなんや」

ヨソ 「ほら、見てみ。あんたの映画を見て、笑うたり、泣いたりしてくれ  
た人たちが、あんなにいてくださるやない。充分やないか、貞雄」

貞雄 「……………」

ヨソ 「うちは、あんたのお母ちゃんによかったよ」

貞雄 「お母ちゃん……」

ヨソ 「お疲れさまでした」

空から無数の紙風船が降ってくる。

風に吹かれて飛んでいく紙風船。

活弁士たちが一人一人立ち上がってくる。

ヨソ 「ほら、みんなあつまりや。せっかく家族がそろったんや、ひさしぶ  
りにみんなで貞雄のつくった映画を見ようやないか。ほら、みん  
なそこすわって。ほら、作次郎も喜与蔵も、しゃきつとし。えい  
さん、道子も、そこにすわって。こらっ市太郎、ざーつと連絡も  
せんと、いままでなにしとったん、この子はまったくもう。はい、  
小夜さんは、貞雄の隣に座って。ほな、そろそろいくで。まだ誰  
も見えない、山中貞雄の新作の上映やで。はじまり、はじまり！」

彼らの眼前に作られなかった映画が上映される。

家族一同で映画を見る山中の家族たち。

END